

色のない絵

郷 静子

色のない絵



郷
静子

自由企画・出版

著者紹介

昭和4年横浜に生まる

鶴見高等女学校卒業

第68回芥川賞受賞 受賞作品「れくいえむ」

現住所 横浜市磯子区森 5—2—26

色のない絵

昭和50年6月1日 第1刷

定価 880円

著者 郷 静子 © Shizuko Go, 1975 Printed in Japan

発行者 新妻 富保

発行所 自由企画・出版

東京都渋谷区渋谷 1—23—21 (〒150)

電話 03 (407) 7811(代)

振替 東京 103870

印刷所 有限会社 舟津印刷

横浜市西区久保町26 電話 045 (242) 3171

乱丁本、落丁本はお取りかえいたします

現在から

あの頃のこととは忘れてしまった、と思っていた。自然に忘れた、というよりも努力して忘れたといった方が正しい。それは超えるべきことであり、超えなければならぬことであり、そして、私はたしかに超えたのであったから。ずいぶん、危っかしい超え方ではあったけれども。

その頃、私は二度目の療養生活に入っていた。再発して半年近くは氣胸療法というのを受けに診療所に通ったが、その内肋膜が癒着して氣胸の効果がなくなり、あとはただ、焼跡の簡易住宅のむき出しの屋根の木組みを眺めて、寝ているしかなかった。既に、進駐軍にはストレプトマイシンのあることがわかっていて、それを入手する伝手もなくはなかったが、当時の我が家の経済状態は、とうていそのような贅沢を許さなかった。しかし、なおる手だてがあるのにそれをあきらめて、見通しのない病床で日々を過ぎなければならぬことは、若い私にはつらいことであった。

当時、父は、電気工事請負業をささやかながら自営していた。小心な善人である父は、

仕事には一生懸命であったが、どういうわけか営業面では思わしくいかなかった。月末には、母の零細な収入が、従業員の給料の不足分にあてられたりしたくらいである。また、税務署からは、バラックに多少手を入れた程度の家にも、容赦なく差し押えの通知が送られてくるのだった。

母は、家が横浜駅のすぐ近くにあるという利点を元手に、荷物預り所をしていた。客が自分で持ってきて来て、自分で受け取りにくる荷物を預るだけの仕事だけれど、実際には、信じられないほどの重労働なのであった。荷物は普通、預けに来た順に受け取りにくる。当然、後から来た客の荷物と、先に来た客の荷物は、常に入れ替えておかなければならない。加えて労働時間の長さがあった。営業時間は、朝の一番電車から夜の終電車が通り過ぎるまで、実に一日二十時間にも及ぶのであった。

気丈な母は、ろくに愚痴もこぼさず、終日、働いた。しかし、生活費ばかりか、父の仕事の穴埋めまでしなければならないきびしい暮しは、母にとっては、きつい負担であったにちがいない。父も母も、派手に争う、というようなことの出来ないたちだったけれど、それだけに疲れた二人の姿は、幸せな夫婦像からはほど遠いように私には思えた。

二十歳を過ぎた一人娘が、もし健康ならば若く元気な婿を迎えて、この苦境から何とか抜け出る方途もあろうものを、と父母が思ったとしても、今の私なら、わからないことではない。また、そこまで行かなくても、せめて、母や祖母の重荷を分ち持つことくらいしてくれたら、と望んだであろうことは想像にかたくない。しかし、当時の私には、そのような父母の苦しさを、思いやる余裕はなかった。

私はひたすら自分の内側に閉じこもり、かたくなにいく重にも心を武装して、自らを守る他はなかったのである。私には、私の周囲はすべて私を痛めつけるもので覆いつくされているように思えた。既に七十歳に近かった祖母が元気で、家事一切をとりしぎってくれたことは、唯一つの救いであったが、そのことがまた、私にはつらいことになってしまふのであった。私は、北向きのいつもす暗い感じの病室にひとりいて、一冊のノートに向って、泣き、わめき、憤り、訴え、いい聞かせしながら、過ぎていく重い時間に耐えたのであった。

時は確実に過ぎて行き、人間には生きていく限り、明日が必ずあるのだということ、私は多分、此の時期を超えた時に、本当に理解したのだと思う。今更、書かずも

がなの未熟な思考をも、あえてそのままにしたのは、過ぎてきた道程の一つ、一つが私にとっては必要な段階であつたと思われるからである。そして、当時と現在とを重ねてみたとき、その余りにも変つた自分と、余りにも変らない自分とが分ちがたく一つで在ることに驚くばかりである。

目次

現在から

一九四九年 二十歳

一九五〇年 二十一歳

一九五一年 二十二歳

一九五二年 二十三歳

あとがき

一

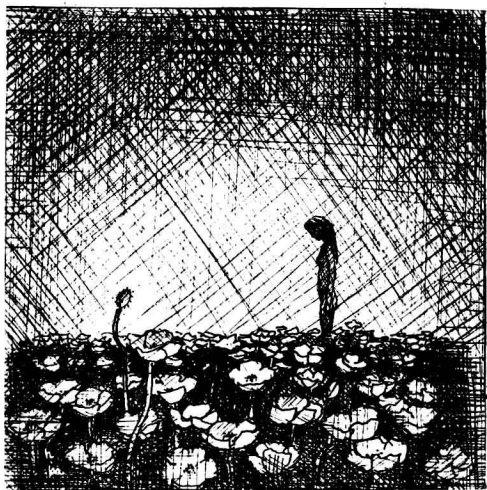
三

二五

一〇三

一九四九年

二十歲



二月・第三次吉田内閣成立

四月・各地に新制大学新設

七月・下山事件、下山国鉄総裁れき死体で発

見

三鷹事件、中央線三鷹駅で無人電車暴走、死傷二〇人

八月・松川事件、東北本線松川・金谷川間で旅客列車転覆

古橋、ロサンゼルス全米水上で自由形世界記録で優勝

十一月・湯川秀樹博士、ノーベル物理学賞受賞

日本は敗れた。

だが、私達は生きている。

私達の同胞は死んだ。

だが私は生きている――。

敗戦国は生きている。勝った国と同じようなみをつづけている。そして、死んだ人々はだんだん忘れられてゆく。忘却――すべてを吞んでしまう透明な流れ。誰だっ
て知らないうちに忘れていくのだ。忘れてはならないことまでも。

何故、忘却があるのだろう。何故、人々は逃亡をはかるのだろう。わからないままに
生きようとするのだろうか。人類史の描く、血の進歩のあしどりを、何故人々は忘れたの
であらうか――。

忘れてはならないことは、過去の持つ、過去のみが知る、いくつかの犠牲の語る声なき教訓なのだ。流血の犠牲をふみこえて生きていく意義は、ふたたび愚かな惨事をひきおこさない、しっかりと自分自身に誓うところこそあるのではないか。過去の尊さは、過去にあったいすべきことを、再びおこすことなく、一步一步完成への道を前進していくところこそあると思う。

私たちは知らなければならぬ。過去を、現在を、そして現在になるべき明日を。忘れてはならぬ。私たちのほらからの、血のにじむ生き方を――。やがて生れる私たちのほらからの為に、私たちの以前に生きたほらからの尊い努力のあしあとを。

たとえ如何なる愚かな生涯であっても、一人の人生は無価値ではない。そして、如何なる高邁な理想にもえた情熱も、一人の人生を通らない限り、その価値はない。情熱は生さなければならぬ。人間は進まなければならぬ。ひとりひとりの生き方が、永遠の未来へつづく道すじにあることを忘れてはならないのだ。

人類は完成を目指して生きている。無限の――はるかなる有限は無限に通ずる――生

長線を辿る人類史において、一人、一人はそのリレーの選手なのだ。バトンを渡された限り、コースなきコースを、真面目に生き抜かなければならない。疲れ果てて倒れた時、バトンは次の選手に渡される。だが、それですべてが終ったのではない。明日は今日の終極から始まる。

一切は、無限である――。

船出！

もうものの悲喜劇を積んで、船は港を出た。円い地球をひとまわり、もとのお国へ辿りつく日が、幸福になれる日だ。

常識の世界を去って、いろんな出来事に疲れた後、再びめぐりあう日の常識の、何という美しさだろう。年月の流れに無関係な安心が、どんなになつかしいものか、やがて自らうなずくことが出来るに相違ない。常識の世界へかえるための、常識への抗議なのだ。

無意味なことだろうか――。

常識は無意味だと嘲ることだろう。そのあざけりに、同感し得る自身が欲しいのだ。そのため、自ら無意味に傷つくことが必要なのだ。

いつの日に、この港へかえり得るか。だんだんかすみゆくはとほの灯の、もうあんなに美しくなってきた。はなれて見ることの美しさを、少しずつわかっていくのだろう。

船出！

もう一直線に進むことだけが唯一つの生き方だ。波は高い。波に溺れて死ぬことは火のようなあこがれなのだが、あこがれは遠くあるのが望ましい。溺れないように。足元用心、火の用心。

幸福は、空気のようどこにでもある。

あること自体が幸福なのだから、世の中には幸福きりないといったら怒られるかも知れないけど——。自分が好きで苦しむなら、苦しむこと自体が幸福だ。

もしも苦しみがいやになったのなら、さつさと逃げ出せばよい。人間はその点非常に自由である。誰に断る必要もない。大体、遺書などというものはキザなものだ。死というものを、妙に特別扱いをするからかもしれない。

何事によらず、物事を特殊感情で考えることは悲劇よりも喜劇である場合が多い。常識という水面のさざなみのようなものに比較して判断を下すことが根本的にまちがっていると思う。死ぬことが幸福ならば死ねばよい。一人間の生き方は、一人間の意志が支配すべきだ。

売淫生活が幸福ならばそれもけっこう。社会に害毒を流すというのか——。しかし売淫は相手がなければ出来ないし、相手はそれを望むのだから、その時は幸福なのであらう。

賭博も同じことがいえる。政治家となるのも、文学者となるのも、実業家となるのも、牧師となるのも、共産党員となるのも、それぞれに幸福であるという一点においては少

しも変らない。

ただ、幸福が必ずしも貴いということはない。個人の幸福が社会の幸福と一致しない場合はかなり多いのである。個人の幸福が社会の幸福と同じになること、一般の多勢の個人が、最高のレベルまで向上した時こそ、すべての人間の幸福は貴いかがやきをそえることであろう。

何事も一度手をつけたら最後までそれを成しとげるべきであるが、殊に求められない親切を他人に施す場合は、相手にありがとうといわせないだけの親切を用意しなければ、その親切は完全とはいえない。

私たちのふつうという親切というのは、求められて友愛に心よく応ずるとか、或いは相手の困難に気がついて、そのまま親切を行動に現わすのがせいぜいである。勿論、冷淡に見て見ぬふりをするより、たとえ不完全な親切であってもするのがよいけれども、親

切の完成や理想は、そこまでいかなければならないと思う。

人類をこらしめて幸福の道に向わせるための化学兵器なら、人を殺すと同時に死人を生かし得る化学を確立してから殺人を行うべきである。現在の化学兵器はその意味からいえば片輪であって、私たちは全人類の名に誓って、かかる片輪を監視せねばならぬ。

人々は多く名演技者である。

アカデミー演技賞はもらえないが、私たちの単調な、そして複雑な家庭生活、社会生活に対して、無意識に、或いは自ら知りつつ、それぞれのお芝居をしている。人々が、もしも円満な、さり気ない平和な日々をもとめるならば、それぞれの位置の要求するままに、おのおのが自己の演技力をみがかねければならぬ。